辺境の地へ飛ばされたオメガ軍医は、最強将軍に溺愛される

Characters

登場人物紹介

辺境の地へ飛ばされたオメガ軍医は、最強将軍に溺愛される

第一章　出会い

リズ・カリルには嫌いな言葉があった。結婚という言葉だ。
冷たい粉雪のように、リズに降りかかるその言葉。
――オメガなのに結婚をしないのかい？
――オメガなんだから早く結婚しなくちゃ。
悪意があるわけじゃない、時候の挨拶のようなもの。けれどリズの心を確実に突き刺す。
だからリズはうつむいて、結婚はしません、と言うのだ。
反論するのは怖いし苦手。でもいつも、それだけははっきりと口にした。
少しでも迷っているように見えたら、すぐに未来が決まってしまう、そんな気がしたから。

今年で二十一になるリズは、物静かな青年だった。綺麗な銀の瞳は常に下を向き、誰とも目を合わさずひっそりと本を読むことを好む。目立つことは苦手で年よりも幼くみられがちだが、肩で切り揃えた鼠色（ねずみいろ）の髪は柔らかにリズの白い頬を包み、滅多に見せない笑顔は妖精のように愛らしかった。

リズが生まれたカリル家は、脈々と続く医者の家系で、父は公爵、海辺の街ミルルを領地とする、とても裕福な家柄だった。

リズの父も母も、祖父母も、従兄弟も、長兄も次兄も姉も、皆、アルファの医者だったので、三男坊のリズもまた、医者になるために必死に勉強してきた。

だが、リズは一族のなかでひとりだけオメガだった。

オメガは、男性でも妊娠が可能な特殊な性。アルファを産む確率が高いので、王公貴族に好まれ、優秀なアルファを多く産むことを望まれる。リズもオメガであるからには医者にはならずに、いずれどこかに嫁ぐのだろうと密かに噂されていた。

しかしリズは、世の常識を覆すかのごとく頑張った。クライス王国にある大学の医学部を、優秀な成績で卒業したのだ。オメガが大学へ行くだけでも珍しいのに、二回も飛び級し、なおかつ首席。努力の賜物であった。

ただ残念なことに、リズの就職先はすぐには決まらなかった。

オメガの医者など一人もいないし、名門貴族出のオメガなど扱いに困ると煙たがられたせいだ。縁故ならばと思っても、兄たちが働いている王宮は、オメガが勤務することはできない。

そうしていくつもの病院の採用試験を受けてやっと採用されたのが、医師の離職率が一番高い軍医だった。

リズは、今しがた届いた軍医採用通知書を複雑な気持ちで、じっと見つめた。

軍医も立派な医者だけど……と、暗い顔をしたまま屋敷の廊下を歩く。

この採用通知書が届いたからには、父に就職が決まったことを伝えねばならないのだ。リズの父は、クライス王宮に勤める医師の最高位、筆頭王宮医官である。

次期筆頭王宮医官になると噂される二人の優秀な兄たちと、王女殿下付きの姉の下、三男として育ったリズ。皆のように華やかな職ではなく、こんな危険な就職先を見せたら……また父は落胆するだろう、と思わずため息がもれた。

「はぁ……軍医かぁ、僕に務まるかな。なるべく領地の近くで働けるようにしてもらえないか、父様に頼んでみようかな……」

二十一歳にもなって親に頼るのもどうかと思うが、リズは昔からとても怖がりなので、許されるなら領地でひっそり医学の知識を深めたい。

しかしカリル公爵家は、貴族の家にしては珍しく、成人したら外で仕事をするのが古くからの伝統であり家訓だった。

皆、普段は仕事で忙しく、家族そろっての食事や行事はない。医師であるという誇りだけが家族をまとめるかすがいだった。

だからリズも医者になりたかった。アルファに生まれなかったからこそ、なおさらその想いは強かった。

カリル家の屋敷は、広い中庭をぐるりと囲む二階建ての洋館で、敷地内に二棟の離れを有する豪邸であった。昔は病院として患者を受け入れていたが、今となっては、滅多に帰らない主のために

使用人たちが掃除をするだけの静かな邸宅だ。
リズの部屋から一番遠い、長い廊下の先に父の執務室はあった。
リズが扉をノックし執務室に入ると、父は当然のように仕事をしていた。机上には書類が積み上がっている。
父であるカリル公爵は領地経営の他に、筆頭王宮医官として月のほとんどを登城している。自宅にいるときは邪魔をしてはいけない、と小さい頃から気をつかってきた。
父はすぐにリズに気づいたが、声をかけることなく書類に視線を戻してしまった。銀色の髪がさらりと揺れて、その鋭い眼光を隠す。リズは、その銀髪を羨ましく見つめた。
家族皆綺麗な銀髪なのに、リズだけ鼠色の髪だった。情けない髪色をさらすのが嫌でいつもフードを目深にかぶっていた。しかしかぶったまま父に話しかけるのはさすがに無作法で、リズはそっと頭からフードをずり下ろした。
「父様、あの」
「どうした、何か用か？」
「あ……お、お忙しいところ、すみません、あの……これ」
ぎゅっと握りしめていた採用通知書を、緊張しながら父へ差し出す。
父は無言で受け取ると、目を通しリズに突き返した。あまりにも早く返されたので、びっくりして固まってしまった。そんなリズを気にかける様子もなく、父はまた書類に視線を落とす。もう立ち去るべきか迷いながら、リズはそのまま突っ立っていた。しばらくして、父は事務的に確認した。
「職場が決まったんだな」
「あっ、はい、あの、軍医……です」
「そうか、傷ついた騎士を治す重要な仕事だ。心して務めなさい」
「はい……あの」
できれば近くの勤務地にしてもらえないかと頼もうと思った。だが、父はそれを見越したかのように言った。
「どんなところへ行っても全力でやりなさい。自分がカリル家の人間だということを忘れるな」
「……はい」
「話はもう終わりだな。出ていきなさい、私は機密事項を扱っているんだ。お前にも見せられない」
「あ、も、申し訳ありません、失礼しました」
そう言うなり、リズは父の執務室から逃げ出した。
扉から出て、はぁっとため息を吐く。温かい励ましの言葉なんてなかった。カリル家の恥になるなとそれだけだ。どこへでも行けと言われたような気持ちだった。
（わかってた、僕がどうなろうと父様はどうだっていいんだって）
きっと誰もリズが医者になることなど望んでいないのだ。
カリルの名を汚すくらいなら、結婚したほうがいいと皆思っているに違いない。医者と結婚の両立はオメガには無理だとも。

うつむくと涙が出そうだった。
一週間後に着任式があり、その後すぐ指定された土地へ行かなければいけない。
泣いている暇なんてないけれど、それでも泣きたい気分だった。

◇
◆
◇

父への報告を終えた数日後、リズの配属地が決まった。王都から一番遠い辺境の地、砂漠都市サララだった。
サララは砂漠に覆われた大都市。盗賊が出没し、隣国ドラクロン王国との国境を巡る対立があるなど小競り合いが頻繁に勃発する紛争地で、華やかな王都とは違う危険な場所だった。
まさかよりによってそんなところに配属されるなんて、とリズは真っ青になった。
リズは生まれてこの方、旅行したこともなければ、砂漠なんて行ったことも見たこともない。ついでに言うなら暑いところは苦手だ。
生まれ育ったミルルは年中温暖な気候で過ごしやすく、水にあふれ、そこかしこに川が流れる綺麗な都だ。いくら医者になるためとはいえ、砂漠という知らない場所に行くなんてリズにとっては恐怖でしかなかった。
だが二日後、新卒騎士派遣部隊について、リズもサララに行かなければならない。
「そんな、サララなんて……どうしよう、え、途中から馬車に乗らないで、ラクダに乗るって書いてある」
リズは自室で、辞令とサララまでの行程が書かれた書類を震える手で持つ。
もちろん、ラクダなんて見たことも乗ったこともない。なんなら軍医試験の必須科目であった乗馬も不得意で、ギリギリで合格したくらいだった。
リズが唯一乗れるのは老ポニーのスフレだけだが、そんな辺境の地へは連れて行けない。
「どうし、よう……ラクダってどうしたら」
深く落ち込みながらも、辺境の地へ行くために荷物を整理する。学生の頃から大切にしてきた医学書や薬草書、道中必要になる薬のリスト、医療器具など、自分の使いなれた物を私物として持ち込むことにした。
「食糧とか水って個人で持っていくのかな、水がなくなったら怖い」
医療現場において、水やアルコールは必須だ。予定では片道十日の旅と書いてあるが、持っていくのだとしたら、どれだけ持っていけばいいのだろう。
村や町を経由していくが、そこに潤沢な水があるとは限らない。そもそも砂漠都市サララは、どれくらいの貯水量があるのか。水の豊潤なミルルで育ったリズには予想もできないことだった。
「責任者のヘルマン子爵に聞いてもいいのかな……あぁ、誰も知り合いがいないし医者は僕だけだし……もしも十日の間に何かあったらどうしよう」
あまりに心細くて情緒が不安定になり、泣きながら荷物を詰めていると、部屋の扉を軽くノックする音が聞こえた。

「リズ？　配属先が決まったって聞いたけど、どこだったの？」
中の様子をうかがうようにして入ってきたのは、姉のマリアンヌだった。銀色の長い髪をポニーテールにしたアルファ特有の華のある彼女はいつも美しい。
マリアンヌはリズが絨毯の上でポロポロと泣いているのを見ると、吊り気味の目を大きく見開いた。そしてすぐさまリズに駆け寄り、綺麗な指先でリズの涙をぬぐってくれた。
「どうしたのリズ、こんなに泣いて、可哀想に」
「ねぇ様、僕、どうしたらいいんでしょう」
「泣かないで、理由をねぇ様に話してごらん」
リズは眉尻を下げ銀の眼から涙をこぼし、マリアンヌを見上げる。彼女の優しい声で余計に涙があふれた。
「僕の配属先は……さ、砂漠都市サララなんです。ラクダで行くって書いてあるけど、ラクダなんて乗れないし、それに医師が僕だけなんです。百人も診るなんて、どうしたら……仕事だからちゃんとしなきゃなのに」
苦しい胸の内を声に出すと、さらに不安になってきた。
軍医は危険が付きまとう仕事だ。自立して行動することが求められる。できないやれないなど甘えと取られるだろう。それに有事の際にはたくさんの人が怪我をする。その際に優先順位をつけて素早く処置をしなければ、助けられる命が喪われることもあるに違いない。
王女殿下付きの女医で、意見をきちんと通すマリアンヌならそつなくこなすだろう。しかし自分

にできるだろうかと、リズは眉根を寄せた。手落ちや抜かりがあれば、やはりオメガは医者になるべきじゃなかったと言われてしまう。
不安と恐怖が膨れ上がり情けなさも手伝って、リズの気持ちはどんどん沈んでいく。
マリアンヌはリズの話を聞いて、聡明そうな顔を曇らせた。
「まぁ、なんてこと！　実践経験のないあなたが、たった一人でいきなり百人も担当するの？　それはひどいわ、ありえないちょっと見せて」
マリアンヌはリズが持っていた指示書をわしづかむと、食い入るように読みはじめる。
「これを書いたのはヘルマン子爵ね、ねちっこい腹黒男だわ。ちょっと待ってなさい、ねぇ様がなんとかしてあげるから」
そう言い残して、マリアンヌは銀色の美しいポニーテールをサッとひるがえして部屋を出ていった。闇を切り裂くひとふりの剣のような凛々しさに、彼女への尊敬の念がますます大きくなった。
マリアンヌは、アルファ特有の気高さと、気品とを兼ね備えたリズの自慢の姉なのだ。
「ねぇ様……僕なんかのために」
王女殿下付きの女医として忙しい日々を過ごすマリアンヌが、自分のために時間を割いてくれるのが、リズは本当に嬉しかった。
しばらくして戻ってきたマリアンヌは、一人の若者を連れていた。
歳はリズと同じくらいだろうか、短い黒髪のキリッとした見目の良い青年だった。身長は背の高

いマリアンヌよりもさらに頭一つ高く、一重の目、真っ黒な瞳には妙な迫力がある。均整の取れた身体はスラリとしていて、品が良く、肌はよく日に焼けていた。リズとは違い活発そうな騎士だった。そして、おそらくこの人はアルファだと、リズは直感した。

まだ荷物を詰めていたリズは、床に座り込んだまま不安げに二人を見上げた。

青年はじっとリズを見つめ返す。リズはその眼差しの強さに困惑しつつ、視線を逸らした。

「リズ、もう安心なさい。あなたの身の回りはこのリュカが面倒をみるから、なんでも頼みなさい。彼は砂漠都市から来たから、きっと道中でも向こうでも役に立ってくれるわ」

リズを元気づけるように、マリアンヌは軽やかな声でそう言い、優しく笑った。

「でも、勝手に連れていったら」

「大丈夫。リュカはもともと新人騎士の一人として砂漠都市サララへの派遣が決まっていたの。だからあなたの手伝いを第一命とするよう、ヘルマン子爵に約束を取り付けたわ、それと新人医師を二名増やしてきたから、もう一人じゃないわ」

「あ、ありがとうございます……ねぇ様」

「だからもう泣かないの。一年だけ頑張ってきなさい。そしたら王都で働けるようにするから」

「はい、ねぇ様」

再び涙が滲んでくる。仕方ない子ね、とマリアンヌは膝をつき、リズの目尻をぬぐう。そして背後に無言で立つ青年――リュカに声をかけた。

「リュカ、この子を頼んだわよ」

「……はい」

不本意そうに返事をするリュカを見て、リズは動揺のあまりマリアンヌに戸惑いの視線を向けた。マリアンヌはやれやれといった表情でリュカをねめつけた。

「リュカ。リズが不安がってるでしょ。あなたのほうが年上なんだからしっかりと……そういえば、あなたおいくつだったかしら」

「二十です」

真顔で放たれたリュカの答えに、リズはさらに怯え表情を硬くした。何せ、彼のほうがリズより年下だったからだ。本当に頼りにしていいのかすらわからなくなる。マリアンヌは視線をさまよわせながら、ひきつった笑顔でリュカを見た。

「あ、あらそう……リズよりちょっと年下だったわね。まぁリズは箱入りで育ったから、精神年齢はきっとあなたのほうがはるかに高いわ。だからお願いよ、リズの世話……できるわよね」

「はい、できる限りサポートします。金も受け取りましたし」

「金？　ね、ねぇ様」

……金とは何事か。

リズは目を白黒させながら、マリアンヌにすがりつく。

「リュカ、お口チャックしなさい。とにかく、リズはなんにも心配しなくていいからね」

妙に早口になるマリアンヌに、リズは少しだけ疑いの眼差しを向けた。そしてもう一度お金について質問しようとしたが、マリアンヌは壁際の時計を見て、リズの肩に手を置いた。

「あっ、もうこんな時間ね！　これから王宮に行かないといけないの。じゃあリュカ、あとは頼んだから、しっかりリズを守ってね。リズも、気を付けて行ってくるのよ」
「あ……はい、行ってきま……す」
ウンウンと頷いて、慌てるように出ていったマリアンヌの後ろ姿を、リズは未練がましく見送る。
そして、扉付近に立ったままのリュカに視線を移す。
しかしうまく目を合わせることができず、うつむいたままリュカに挨拶をした。
「あの、リュカさん……よろしくお願いします」
「あぁ、うん。あのさ、リズって、呼んでいい？」
「は、はい」
姉に対しての口調とぜんぜん違うことに驚きつつも、うなずいた。呼び方などなんでもいいが、いきなり呼び捨てにされたことには困惑した。
いや、そんなことは今は重要ではない。リュカに頼まなければいけないことがあるのだ。
「あの、砂漠に着いたらラクダの乗り方を教えてくれますか」
「え？　乗り方？　教える？」
するとリュカは不思議そうに首を傾げた。
「教えるも何も、乗ればいいのでは？」
乗ればいいとはどういうことなのか。それを手伝いに来てくれたのでは？　と、リズは戸惑う。
「え？」

「は？」
リズの問いに問いが返ってきて怯む。でもここで話を終えるわけにはいかなかった。
ラクダに乗れなければ、サララには行けない。
サララに行けなければ、医者として働けない。軍医だろうとなんだろうと、リズは医者になりたいのだ。
「あ、でもほら、乗り方のコツとかあると思うんですけど」
「乗り方のコツ？　そんなに難しくは……もしかして今怪我してる？」
「いえ！」
リズが弾かれたように立ち上がると、リュカはまっすぐ近づいてきて、まじまじとリズを見おろした。
視線がかち合う。リュカの黒く聡明そうな瞳の奥に、戸惑いが見えた。こんな怖がりで軍医など務まるのか？　と侮られているのだろうか。リズの心の中にまた別の不安が生まれ、にわかに涙が溜まる。
涙目のリズをしばし無言で見つめていたリュカは、意外にも心配そうな声で言った。
「本気でサララに行くの？　大変だよ？」
「はい……行きます。一年だけですが。軍医のお仕事……できる限り頑張ります」
行きたくないのは山々だが、行かざるを得ないのだ。
行くと決めたからには頑張るしかない。必死な様子のリズを見て、リュカは神妙な顔で頷いた。

「わかった。君を、必ずサララに連れていく」
大丈夫、一年だけ。一年間頑張ればいい。そうすれば帰ってこられる。
サララで軍医として実績を積み、その後は王都で働く。
たった一年だけだと思っていても、リズの心には未体験の旅への不安と恐怖が渦巻いていた。だがリズは自らを奮い立たせるように、リュカに頭を下げた。
「お、お願いします」

◇◆◇

マリアンヌのおかげで、砂漠都市サララへの新人騎士派遣部隊は、急遽大量の物資を手に入れることができ、さらには組織自体も編制が細かく見直されることになった。
その際、ヘルマン子爵の不正が露見して、彼は担当を外されたそうだ。
おかげで、マリアンヌの言ったとおり、リズの他に二名の新人医師が加わることとなった。
砂漠都市サララへの出発日。
新人騎士たちは、クライス王国の軍事施設の広場に召集された。各々が馬や馬車に荷物をくくりつけ、旅立つ準備をしている。
リズもリュカを伴って、馬車に荷物をいれこむ。早めに支度が終わったので、同僚となる新人医師の二人に挨拶をしようと思い立った。

目当ての二人は、大きな木の下で笑いながら荷造りをしている。ぜひとも仲間に入れてほしくて、リズは機を見計らって二人に声をかけた。
だが、リズは知らない人に話しかけるのがとても苦手だった。
頑張って話しかけたが、髪のことを言われるのが嫌でフードを目深にかぶり、目が合うのも怖いからさらに顔を伏せ、声は小さくなんとも奇妙な挨拶になってしまった。
「はじめ、まして……僕、あ、私は、リズ・カリル、です」
いきなり話しかけられたせいか、二人は顔を見合わせた。なんだこいつは、と訝る声が聞こえたような気がして、リズは挨拶したことを後悔した。しかも一人が荷造りの手を止め、ニヤリと笑ったのだ。ビクッとしたリズは、どうするべきかわからず固まった。挨拶の失敗も相まってただちに逃げたい。恐怖で固まったままのリズに近づく男は相変わらずニヤニヤしていた。
「やぁ、あなたが噂のカリル家のご子息？　有名な医者の家系なんだってね」
「こら、トーマスやめとけって」
トーマスと呼ばれた男は、長い金髪を後ろで束ねたスカした感じの青年で、見た目からしてリズの苦手なタイプだった。仲良くなれそうにない気配が漂う。
けれどもう一人の人のよさそうな青年がトーマスを呼び止め間に入ってくれたので、リズはなんとか逃げ出さずにいられた。
人のよさそうな青年は優しげに目を細め、リズに手を差し出してくれた。
「どうも、マルス・ローランドです。新人医師ですよろしく。僕たちは、クライス第二大学出身で、

こっちのトーマスとは同期なんです」
　人のよさそうな青年――マルスは、穏やかな口調でリズを安心させるようにゆっくりと話してくれた。太い眉毛が特徴的な、ポッチャリとした温厚そうな茶髪の青年だった。とても感じよく挨拶してくれたので、リズは緊張しながらも笑い返した。
　この人となら仲良くできそう、とホッとしていると、トーマスがマルスの背後からぬっと現れ、リズに話しかけてきた。
「俺はトーマス・ランダー、よろしく」
　トーマスからも握手を求められ、リズは今度は恐々と手をにぎった。
　するとトーマスが急に手をひっぱった。砕けた口調とは裏腹に、ペンだこのある苦労がわかる手だったから油断した。リズはよろめいてトーマスに抱きかかえられた。
「わっ」
「おっと、ごめんごめん。これからよろしくね、カリル様」
「よ、よろしくお願いします……あの、リズと呼んでください、マルス様、トーマス様」
「ふはっ、かーいーな。じゃあ俺のこともトーマスって呼んでよ、リズちゃん」
「こら、トーマス。いくらなんでも無礼すぎるぞ、公爵家の方なんだから」
　マルスが眉尻を下げて、すみませんと謝る。リズはかぶりを振った。
「家のことは気になさらず、僕は不出来な息子なので」
　そう言い、リズはうつむいた。目深に被ったフードがリズの顔をさらに隠す。これ以上会話がもたない、どうしよう、と焦っていると、助け船をだしてくれたのはリュカだった。
「俺はリュカです。この人の世話を任されてます。はい、そろそろ手を放してください」
　そう言うなりリュカはトーマスの手を掴むと、彼からリズを取り返し背後に隠した。
　突然のことにリズは驚いたけれど、トーマスは機嫌を損ねたようだった。
「世話？　はっ、さすが公爵家様だ、世話人なんかいるのかよ、俺たちとは命の価値が違うもんなちぇ……いこーぜ、マルス」
「おい……あー、リュカさんもよろしく。じゃ、僕たちはあっちの馬車なんで」
　トーマスは鼻で笑って足音荒くその場から離れ、それを追ってマルスがペコペコと頭を下げながら行ってしまった。
　取り残されたリズは、青ざめた顔でリュカを見つめた。どう考えても、仲良くなんかなれてない。どうしよう、と不安めいた視線をリュカに送ると、彼は小首を傾げた。
「どうした？」
「あ、あの……僕たち、あの二人に嫌われませんでした？」
「え？　あぁ、まぁ、公爵家なんてそんなもんだから」
「……そんなもん」
　公爵家というだけで嫌われたのかとリズは目を白黒とさせる。
「出自で嫌われるなんて」
「まぁ、よくあることだよ、気にしないほうがいい」

そう言うと、リュカはリズが持っているバッグを片手で掴み、淡々と馬車の中に入れる。
本気で気にしてなさそうで、それもどうなのかとリズは思うけれど、この胸のモヤモヤをうまく言語化できそうにない。
悩んでいると、突然リュカにひょいっと持ち上げられ、馬車に乗せられてしまった。
「ちょ、ちょっと、リュカさん！　馬車はさすがに一人で乗れますよ」
「いいからはやく座って。もう出発するみたいだから、馬車の中ではおとなしくしてて」
リズの抗議の声など聞こえなかったように、リュカは淡々と告げて御者台にあがる。
しかしよく見ると、なぜか彼は上機嫌だった。サララに帰れることが嬉しいのだろうか。
馬車が動き出したので、リズは仕方なく腰を下ろした。
リュカが慣れた様子で馬に鞭を振るうと、馬車はゆっくりと加速を始めた。
王都がどんどん離れていく。さっきまで緊張で張りつめていた心は、リュカとのやり取りのおかげでだいぶほぐれていた。
リズは、去り行く故郷を切ない面持ちで眺めた。
これから一年間は、王都にもミルルにも、帰れない。
ミルルの煌めく海を思い起こしながら、できるなら一日でも早く帰りたい、とリズは願ったのだった。

◇
◆
◇

サララまでは十日間の旅だ。
リズは行程表に何度も目を通してすっかり覚えた日程を、御者台にいるリュカに話した。
「リュカさん、結構長い旅になりますね。十日間、よろしくお願いします」
「あぁ」
リュカは口数が少ない。返事こそしてくれるが、そこから話が膨らむことはほとんどなかった。
いつもリズを静かに見守ってくれている。それが仕事なのだろうが、リズにとっては少し寂しかった。
行程表通りなら、まず王都から三日かけて鉱山都市ガロンへ向かい、そこで一泊。ガロンの先から砂漠へ入るので夜の移動となり、ラクダに乗り二日かけて移動しオアシスで一泊、さらに三日かかって砂漠都市サララへ到着する。
マリアンヌによって再編制された部隊は、以前と同じく多くは新人騎士だが、内訳がだいぶ変わった。貴族出身騎士が三十五名、平民出身騎士が六十名、リズを含む医師が三名と手伝いのリュカ、そしてこの新人騎士団を率いる団長と副団長だ。
団長はクロイツ子爵家三男、モーガン・クロイツで、副団長はリザーク男爵家次男のホフマン・リザーク。それぞれ二十四歳、二十三歳と年若い。新人騎士団とはいえ、その年齢で団長、副団長に任命されるのは中々の出世だ。
モーガンは文武両道の人で、鳶色のくるくるとした癖毛が特徴的な甘いマスクの男性だ。もとも

とは国の事務方として働いていたが、今回要請があって団長に任命された。
ホフマンは男爵家が営む商売を継ぐつもりだったが、腹違いの兄によって騎士団に放り込まれたんだとか。いろんな土地を巡るために、今回の要請を引き受けたらしい。
二人はとても仲が良く、リズが事前情報を二人に聞いたときも冗談を言い合っていた。あんな風にリュカと仲良くなれないものかとリズは思うけれど、なかなかうまくできないのが悩ましい。
ちなみに王国軍の騎士になるには、軍の騎士学校を卒業するか、貴族出身の騎士に推薦されるか、クライス第一総合大学騎士科を出るかの三通りの方法がある。平民出身の騎士は騎士学校出身が、貴族出身の騎士は、大学の騎士科を卒業することが多い。
そんなことを思い返しながら馬車に揺られること半日。
昼食休憩の時間となり、馬車は丈の低い草が広がる草原に止まった。リズは馬車から降りて、手近にあった岩の上に腰を下ろした。リュカはリズの昼食を用意したあと、どこかへ行ってしまった。
リズは一人、リュカが用意してくれた昼食をとっていたが、そういえばガロンへ行く道中に気になるところがあった、と鞄から地図を引っ張り出した。
リズが家から持ってきた地図は地形が細かく描かれたもの。値段が高いが、用心するに越したことはないとマリアンヌに渡されたのだ。
地図を眺めていると、背後から声をかけられた。振り返ると、モーガンが立っていた。
「やぁ、カリル医師。何を熱心に見ているんだい？」
「あ、モーガン団長。お疲れさまです。あの、地図を見てました」

「地図？　何か気になることでも？」
「いえ、岩石地帯の複雑な地形なので、もし落石に遭ったら怖いなと思って。昨晩少し雨が降って地盤が緩んでいるかもしれないので」
「落石か、確かに注意しなければな」
モーガンは顎に手をやりながら、進行方向にある岩石地帯を眺める。
「ふむ……岩石地帯の道は泥濘があって滑りやすいし、君が言うように落石には注意が必要だ。万が一大岩でも落ちてきたら、一個隊やられかねないな」
そしてリズが見ていた地図を覗き込み、指さした。
「この細い道を進もうと思っていたが、こちらの少し遠回りになるが広い道がいいだろうか」
「そのほうがいいと思います。こちらの細い道は無理に山をくりぬいたせいで、壁面が崩れやすいですから。風も出てますし、念には念を入れたほうがいいかと」
「……君は公爵家の箱入り三男と聞いていたが、自分の意見を持っているし、知識も豊富だな。噂ほど世間知らずでもなさそうだ」
ふいにそんなことを言われて、リズは思わずうつむいた。褒めてもらえて嬉しかったのだ。
「あ、ありがとう……ございます」
「君は確か、オメガなんだったか」
「え、あ、はい……あの、僕がオメガだって皆さんはご存知なのでしょうか」
オメガというだけで、色眼鏡で見られる世の中だ。しかもリズは家柄でも悪目立ちしてしまう。

もしかすると、新人騎士のなかでもカリル家のオメガ医師と馬鹿にされているのだろうか。
だがモーガンは、違う、と首を横に振った。
「いや、知っているのは私と副団長だけだ、もちろん他の人に喋ったりしない。バース性なんて個人的なことを迂闊に口にして、すまなかった」
「いえ、いいんです。事実ですから」
「こう言ってはなんだが、公爵家のご子息なら見合い相手がたくさんいただろうに、なぜ軍医なんて危険な仕事を？」
その質問は、小さい頃から幾度もされてきた。オメガなのになぜ結婚しないの？　と。モーガンが聞くのは当たり前のことだった。リズは、うつむいたまま、硬い表情で呟く。
「確かに公爵家の一員ですが、不出来な僕と縁を結びたい人はいないようで、縁談が来たことなんてないんです。それに僕は医師として生きたいので、結婚は考えていません」
「そうなのか？　世間の情報とは当てにならないものだな。君は公爵家の深窓の令息で、数多の求婚者がいるがすべて断っていると噂されていたから」
「そんな噂が？　たぶん、姉と勘違いされているのだと思います。ねぇ様はとても素敵な人だから、きっと釣書も山のように届いていることでしょうね」
「あー……いや、それは違うと思うぞ。君の姉君は深窓の令嬢というイメージとはかけはなれていてだな。というのも、私は以前、君の姉君を見たことがあるんだ」
リズは思わず目を輝かせた。

「君の姉君は銀狐の異名を持っていて、たまに騎士団の練習場で剣を振るっていたんだ」
「ねぇ様が……剣を？」
「私はてっきり、立派な女騎士がいるもんだと感心したんだが、同僚があれは医者だと言うもんだから驚いたよ。憂さ晴らしのために、ときどき剣を振るうんだそうだ」
「すごい、ねぇ様……かっこいい」
モーガンの話にすっかり夢中になって、リズはフードが顔から落ちたことにも気づかず、モーガンを見つめた。
「ねぇ様は、とっても優しくて強くてお美しい人ですから」
リズはマリアンヌを思い出してにっこりと笑う。すると、モーガンはぎょっとした顔になった。
「君は、とんでもない美少年だったんだな。……だがこれはちょっとまずいな」
「え？」
モーガンは、うーんと、腕を組んで空を見上げる。
「カリル医師。これから本格的な砂漠地帯にはいって陽射しもきつくなるから、君は常にフードを被っていたほうがいい」
「あ、そうですね。熱中症にも気を付けないと。皆さん、水分は足りてますか？」
「あぁ、水袋の中身が三分の一ほどなくなったらすぐに補給するよう伝達してある。……それにしても君に縁談が来ないという話は本当だろうか」
モーガンが話を戻そうとする。リズが口を開こうとすると、急にぶっきらぼうな声で横槍が

入った。
「そろそろ出発の時間では？」
いつの間にかリュカが馬車にもたれかかり、こちらを見ていた。
モーガンがハッと振り向き真顔になる。背後にいつの間にか男がいたことに気づかず驚いたようだ。しかしそんなことなど構わず、リュカは横柄な態度で二人の間に割り込んだ。
「無駄話は終わりました？」
「無駄というわけではないさ。実に有意義だった」
「へぇ」
「ちょ、リュカさん！　あの、この人団長さんなんですよ」
「知ってる。さ、リズはもう馬車に乗って」
するとモーガンは、リュカをじっと見つめて眉間にしわを寄せる。
「君は……」
「変な気起こさないでくださいね、この人に何かあったら、おっかない銀狐がやってきますよ」
リュカは顎をくいっと上げて、自身の腰にさげている剣の柄を握った。モーガンはリュカの剣に視線を移し、眉間のしわをさらに深くした。
「別に、彼には何もしないよ」
「そうですか。ならずっとそうしてください、この人は俺が護るんで」
「……だが」

「俺、強いですよ？　たぶんここにいる全員殺せるくらいにはね」
不穏な言葉を吐いて、リュカはモーガンを睨む。
しばらく二人は無言で睨み合っていたが、モーガンが先にため息を吐き、ひらひらと手を振って先頭へ戻ってしまった。
「りゅ、リュカさんっ」
リズは、リュカの態度を注意しようとした。しかしリュカはそんな時間を作ることなく、リズを軽々と抱き上げ馬車に放り込んだ。
「ちょっ！　だから馬車には一人で乗れますから、わざわざ抱っこしないでくださいってば」
「はいはい」
二度目の苦情だが、リュカは聞く耳を持つ様子はない。リズは御者台に上がったリュカの隣に移動すると、リュカの服の裾をつかみ口を開いた。
「あの……リュカさん。前から思ってたんですが、ちょっと言葉のチョイスが悪いです」
「はぁ」
「世の中にはしがらみがたくさんあって、失礼が過ぎると優秀でも出世できなくなるんですよ」
リズもたびたび経験するが、しがらみというのはとっても面倒なものだ。
「へぇ」
「聞いてます？　もうちょっと上官には敬意を払ったほうがいいと思うんです」
「はいはい」

全く心に響いていないといった声が返ってきて、リズは肩を落とした。せっかく容姿が良くて馬車の扱いも上手くてなんでもできるのに、他者への態度が悪すぎるのがもったいない。

でもなぜか、リュカのことは怖くない。ぶっきらぼうだし、だめって言っても抱き上げるし、あんまり喋ってくれないけれど。

リズは不思議と、リュカのそばをとても心地よく思っていた。

その後新人騎士団は、リズの助言が役立ったか落石に遭うこともなく、無事に岩石地帯を通り抜けた。このまましばらく道なりに行けば、予定どおり二日後には鉱山都市ガロンに到着する。

リズにとっては初めての旅で、騎士たちの体調や怪我を気にして気持ちが落ち着かなかったけれど、特に大きな問題が発生することはなく、擦り傷を数回治療した程度で出番はほぼなかった。

食事や野営はリュカが手早く丁寧に準備してくれたので、リズは快適に旅ができていた。

それにしても、リュカは料理から馬の世話まで卒なくこなす。車輪が外れたときだって、そこら辺の蔦を使ってすぐに直した。

リズからすれば、魔法でも使っているのだろうかと思うくらい、何もかも完璧な人。

お手伝いの新人騎士、と言うには違和感を覚えていた。

旅は順調に進み、騎士団一行は鉱山都市ガロンの入り口に到着した。高くそびえ立つ巨大な鉄の門が印象的だった。

ガロンは強固な要塞のような都市で、門の両脇には巨人兵の石の像が立っており、あたかも門を邪悪な何かから守っているようだった。

門を通りすぎると、旅の一行を誘うように大通りが広がっていた。

ガロンはもともと鉱夫たちが集まって作った街なので、飲み屋が多い。街の露店には珍しい鉱石や宝石が並び、鍛冶屋や武器屋、防具屋といった鉱山都市ならではの店が並んでいた。

騎士団一行は、街の大きな宿屋を貸し切りにしてもらって一泊することになっており、リズはリュカ、マルス、トーマスとの四人部屋だった。

「あー！　つっかれたぁ！」

部屋に入るやいなやトーマスが目の前のベッドへ飛び込むのを、マルスが眉をひそめながら見る。

「ちょっと、トーマス！　ごめんリズさん、トーマスが勝手にベッド決めちゃって。リズさんはどれで寝たいですか？」

「あ、僕はどこでも」

「リズはここ。んで、俺はここ」

リズがマルスに返事をしながら適当な場所に荷物を置こうとしたら、急にリュカに腕を引っ張られ、ドアから一番離れた窓際のベッドへ連れていかれた。

「うわっ、ちょ、リュカさんっ」

「何？」

「急に引っ張らないでください」

「急？　ははっ、リズはボケッとしてるからなぁ」

リズの注意にもリュカは全く動じず、リズをまるで子供のように扱う。リズはマルスに謝ろうとしたけれど、マルスはひきつった笑顔で大丈夫だよとうなずいた。

結局マルスはトーマスの隣のベッドを使うことになり、リズは内心で何度もマルスに謝った。

そうして各々が荷物の整理を始めると、リュカは人目も憚らず上半身裸になった。それを見たマルスが、そっとリズに耳打ちをする。

「ね、リュカさんって、お世話係っていうわりには強そうだよね、見てよ、あの服を脱いだ後ろ姿。ほっそりしているけど、柔軟な筋肉がバランスよくついててすごいよね」

マルスが言うように、リュカの身体はよく鍛えられており、リズは同じ男として憧れを抱いてしまう。あんな風になれたら、と自身の貧弱な腕に視線を落としぎゅっと力こぶを作ってみるが、かすかにぴくっと動いただけだった。リュカの筋肉質な腕とは雲泥の差である。

「そうですね、リュカさん、かっこいいです」

「なんかめちゃくちゃ強そうだよね。とりあえず、怒らせないようにしよう。リズさんへの対応をみる限り、短気そうだよね」

「まぁ、短気というほどでは……態度がちょっと」

小声で話していると、視線が気になったのか、リュカが不意にこちらを見て目を細めた。

「なんですか？　もしかして俺のこと誘ってます？」

とんでもないことを言うものだから、二人は急いで口をつぐんだ。

荷物の整理を終えて、リズたちは食堂へ向かった。

宿の一階にある食堂は宴会場のように広く、各テーブルには次から次に酒や肉の載った皿が運ばれていた。

団長のモーガンの挨拶のあと食事が始まったが、酔った騎士たちが腕相撲や腕立て伏せの回数を競いはじめ、なかでも副団長のホフマンが、そのガチガチムチムチの筋肉を見せびらかすように、上半身裸で腕立て伏せをするのが面白い。

お腹いっぱい食べたあと、リズは騒ぐ騎士たちを羨ましそうに眺めながら飲み物を飲んでいた。初めての賑やかな食卓に少し興奮していて、彼の色白の頬は薔薇色に色づいていた。

「ホフマン副団長ってかっこいいですね」

「え？」

「あんなにたくさん腕立て伏せができるなんて」

リズのうっとりとした声に、リュカは眉根を寄せる。そしてホフマンを見ると、ホフマンは片手で腕立て伏せをしていた。

「リズは、ああいうガチムチ系が好きなの？」

「ち、ちがいます！　羨ましいんです。僕は体がペラペラなので、あんな筋肉があったらと」

「あんな筋肉ねぇ……俺が守るから、リズにはいらないと思うけど」

そう話すリュカが不服そうだったので、リズは目をみはってリュカをじっと見つめた。

「……何？」

「リュカさんって、僕の護衛なんですか？」
「は？　まぁ似たようなものでは……」
「ねぇ様の言い方だと、てっきりお手伝いとラクダに乗せてくれる人だと思ってました」
「……」
「じゃあ、護衛なら腕立て伏せたくさんできるんですか？」
「リズ、それ何飲んで……酒か」
リズの手元のグラスを一瞥するなり、リュカはグラスを奪いとり、軽々と彼を抱き上げた。そのまま部屋に戻ろうとしたが、リズはホフマンを指さし駄々をこねはじめた。
「腕立て伏せして、リュカさん」
「もう黙って。部屋に連れてくから、喋ると舌噛む」
リュカはリズを横抱きにして階段を上る。しかしその最中もリズはリュカにしがみつき、まるで猫が飼い主に甘えるように頭をリュカの胸に擦り付けた。
「腕立て伏せしてくれるって言いましたよね」
「言ってない」
部屋に入りベッドにリズを下ろそうとしたのだが、リズが放さない。
「こら」
「嫌です。してください」
「放せって」

「やだ、してくれるまで放さない」
「……」
「いやですぅ、りゅかしゃん、して」
酒のせいか、リズの呂律が回らなくなってくる。しかし、腕の力は緩まずぎゅうっとしがみついていて、なかなかリュカを放さない。
「ほら、放せ」
「やですぅ～、して～」
「だからそういう発言は……」
とそのとき、ドアが開いた。リュカが勢いよく振り向くと、トーマスとマルスがリュカたちを見て固まっていた。
「ねえ、してってばぁ、リュカしゃ～ん」
「お、お取り込み中……すまなかった」
そう言い残して、二人は勢いよくドアを閉めた。
リュカは少しの間考えこんだ様子だったが、「まぁいいか」と呟きリズの介抱に戻る。
結局、トーマスとマルスはその晩、部屋に戻ってこなかった。

翌朝になって、ようやくトーマスとマルスが部屋に戻ってきた。でもなぜかノックしたあとなかなか部屋に入ってこないので、リズがどうぞと促すと、恐る恐るといった様子で入ってきた。

不思議なあまり、リズは首を傾げた。
「おはようございます。昨晩はどこでお休みになったんですか？」
「あ、っお、おう、友達の騎士の部屋へ」
「そうなんですね、楽しそう」
「そっちも楽しんだんだろ？」
トーマスがニヤニヤしながらリズをからかうと、マルスが猛烈な勢いでトーマスの横腹をつつく。
だがトーマスは腹を押さえつつも、好奇心旺盛な様子でリズに問いかけた。
「で、リュカしゃんに何回してもらったんだ？　ん？　言ってみ」
「あ、はい！　百回以上してくれました！」
リズが元気に答えるなり、マルスは書類をパラリと取り落とした。
「ひゃ、ひゃく!?」
「……まじか、ただもんじゃねぇな」
二人は青ざめたまま、もう何も言わなかった。

◇◆◇

夕刻、ガロンを出立した一行は、砂漠地帯に足を踏み入れた。岩石が減り一面砂の世界が前方に広がっている。

砂漠には目印がなく方向感覚を失いがちなので、星を見ながら進む。だから、砂漠地帯ではラクダに乗って夜通し進むことになっていた。
「……とうとうこのときが来てしまいました。リュカさん、お願いします！」
ラクダの横に立ったリズは、リュカを見上げた。リュカはラクダの横腹に荷物を均等に垂らすようにくくりつけ、そのついでにひょいっとリズを抱き上げ座らせた。
「ひゃわっ！　ちょ、掛け声くらいください」
「ノセマス」
「遅いっ！　あああ……た、高い……」
リズがコブに情けなくしがみついていると、ふいにラクダがくるっと首を曲げて、つぶらな瞳で見つめてきた。長い睫毛（まつげ）がうるうるとした瞳の上で瞬（しばたた）く。
「あ……ラクダさん。お背中お邪魔してます、よろしく」
「クワァ」
「わぁ、鳴いた！　リュカさん、聞きました？　ラクダってくわって鳴くんですね、可愛い」
「うん」
挨拶程度に頷いてから、リュカはリズの後ろに慣れた調子で乗った。
「じゃあ、行くけど……大丈夫か？」
「だ、大丈夫っ、です。進んで、ください」
「そんなにしがみついてると逆に危ない、もっと背筋伸ばして」

「こ、こうですか」
リュカの言うとおりなんとか背筋を伸ばしてみるが、腰が引けていてどうにもバランスが悪い。
これではラクダが歩きだしたら落ちそうだ。
「リュカさん、あの……ラクダから落ちたら、し、死にますか？」
「まぁ、場合によっては」
「ううっ、こわい」
「はぁ、もっとこっちに来て」
「え、あっ、ひゃわっ!!」
リュカの言葉と同時に、強引に肩を後ろに引っ張られる。
落ちる！　と思った瞬間、リュカの胸と腕がしっかりと支えてくれた。
「落としたりしないから、そのままもたれておとなしくしてて」
「あ、はい……」
後ろから支えられているだけで、なんという安定感。
おかげでリズはだいぶ余裕が出てきた。
「ラクダって、馬より乗りやすいかもしれません」
「そう」
「ええ、これなら僕にも余裕かも……って、なんかスピード上がってません!?」
「ラクダ速いから」

「え、走るの？　ひっ、あっ、ひゃぁ！」
突然、騎士団全員のラクダのスピードが上がった。前のほうで団長の持つ旗が揺れる。
「砂嵐が来る前に、この先の大岩まで走るぞ」
伝令が飛び交い、騎士たちに緊張が走る。
砂嵐という言葉でリズが空を見上げると、黒い雲が立ち込めていた。気流が乱れ始めており、砂が舞い上がって視界がぼやける。
「ちょっとこれかぶって」
「ふんぐっ」
すると、リュカが自分のマントを被せてくれた。
揺れるし視界がなくなるし速いしで、手汗が止まらなくなる。必死でラクダにしがみつき、恐怖のあまり意識が朦朧としてきたとき、リュカに腰を掴まれ抱きしめられた。
耳元にリュカの少し乱れた息がかかる。
彼の力強い腕に抱き寄せられて、リズはいつの間にか恐怖が消え、心地よく感じるようになっていた。
（リュカさんはいつも助けてくれる。でもそれは、ねぇ様がお金を払って頼んでくれたから）
大金の対価としてリズの安全が守られている。そう再認識して、リズはさびしい気持ちになる。
しかし耳元の吐息を感じるなり、リズの胸はドキドキと騒いだ。砂嵐の恐怖のせいなのか、走るラクダの不安定さのせいなのか、それとも……

無事に皆が大きな岩影に到達したころに風が強くなり、辺りが見えないくらい砂が巻き上がった。
岩陰で一息つく皆の中で、リズはまだリュカにぎゅっとしがみついていた。
リュカから良い匂いがしたのだ。まるで南国のフルーツのような、甘いのに清涼感がある匂い。
リズは、リュカの首筋に無意識に顔を近づけた。
「リュカさん良い匂いですね。甘いフルーツの香りがします」
「え？　これリズの匂いだろ？　こんな甘ったるい香り」
「……え？　僕？」
「あぁ、上質な果実酒みたいな……」
そこまで言うや否や、リュカは目を見開きリズから身を離す。しかしリズは手を伸ばしてリュカの腕を掴んだ。
「やだ、もうちょっと」
リズの視界が滲んでいく。身体も少しずつ熱くなり、息荒く苦しげな様子で気を失ってしまった。

◇◆◇

リュカはやむを得ず、リズをマントでぐるぐる巻きにして抱きかかえる。そのまま、ラクダからおろし、大岩の陰で騎士に指令を出しながらラクダをなだめるモーガンとホフマンのもとへ近づいた。
「おい、俺たちは少し別行動をとる。オアシスには先に行っててくれ」
「な、何を言ってるんだ。そんな勝手なことはだめに決まって――」
「いい、ホフマン……水と食べ物を分ける。来てくれ」
ホフマンがいきり立つが、モーガンはすぐに彼を止め、リズに視線を移す。
そしてすぐに手近の荷物から手早く二人分の水と食料をリュカに寄越すと、声を潜めてたずねた。
「オアシスで君たちを待つほうがいいか？」
「いや、可能なら先に行ってくれ。この人がいつ動けるかわからん」
「その子は公爵家のご子息だ、完全に守りきれないなら」
「守る。場合によっては俺の番（つがい）にする」
モーガンは目を見開いた。
オメガであるリズを勝手に自分の番にするというのは、騎士道に反する。
「それは許されない。オメガであっても勝手に番を決めるなどと――」
「この人は俺の許嫁（いいなずけ）だから問題ない。無論、リズが望めばの話だが」
「許嫁？　縁談はないと言っていたぞ」
すると、リュカはわずかにイラついた顔で「は？」と顔をしかめた。
「馬鹿なのか？　公爵家の子息に縁談が来ないわけないだろ。バースが確定すると同時に大量に来るに決まってる。そもそもこんなに魅力的な人に縁談がないとかありえない」

「……いつから許嫁だったんだ？」
リュカは腕の中のリズに視線を落とした。顔色はさっきよりは良くなってはいるが、苦しそうな荒い息は変わらない。
「さぁ？　十年くらい前からかな」
「そうか……君の身分を聞いても？」
「この人と似たような感じ。サリザーラ侯爵家三男、リュカ・サリザーラ」
リュカが淡々と告げると、モーガンは目をみはった。
サリザーラと言えば、サララを含む砂漠全土の支配者で、砂漠の王とも呼ばれる家柄だ。
「それなら納得……です。サリザーラ侯爵家は砂漠の国の、武人の家柄。しかもご三男は、若く武勇に優れた将軍として名高い。あなたはつまり、そのサリザーラ将軍なのですね」
呆然とした声で放たれたモーガンの質問に、リュカは興味なさそうに頷く。
「参りました。我々とはあまりにも身分が違う。はるか雲の上の人だ」
モーガンは生唾を飲み込み、その場で片膝をついた。
「数々の無礼をお許しいただきたい」
「構わない。そもそも言っていなかった俺に非がある」
「寛大な御心に感謝します。……ところで騎士は残さなくてもよろしいのでしょうか。私かホフマンが護衛に残っても」
「いや、いらない。いざとなったらコイツがいるし」

そう言うと、リュカはピュイッと口笛を吹いた。すぐに空から大鷲（おおわし）が舞い降りてきて、リュカの肩にふわりと着地した。
「コイツがいれば連絡は取り合える、お前たちは任務を優先してくれ」
「承知いたしました」
「リズは無事に我がサリザーラ領へ迎えると約束する」
モーガンが敬礼をしてその場を去る。
リュカはリズを抱きかかえたまま安全な岩影へ移り、リズを護るように抱きしめつづけた。
リズのこれは発情の兆しだろう、とリュカは判断していた。アルファであるリュカがずっとそばにいたことで、誘発してしまったのかもしれない。
フェロモンをコントロールできているつもりでいたが、未熟だったとリュカは激しく後悔した。知らず知らず、毒を流し込むようにリズの身体にリュカのフェロモンを当てていたのだ。
番でもないアルファのフェロモンでこんなに参ってしまう、か弱いオメガの性（さが）が、彼の生きにくさを物語っていた。
「すまないリズ、俺が迂闊だった……リズのそばにいることがあまりに楽しくて、気を抜いた」

◇◆◇

夜が明け、昼が過ぎ、やがてまた夕暮れ時が近づく。

リズは目を覚まして、あたりを見回した。
「あれ、ここは？　……えっと、静かですね」
さっきまで、風や砂、ラクダの嘶き、大勢の声といったもので騒然としていたはず。そう思いながらぼんやりしていると、頭上から声がした。
「起きたか？　水飲んで」
そこで、リュカに抱きかかえられて寝ていたことに気づいて、リズは驚いた。
口元に運ばれた水袋の水を飲むと、カラカラだった喉が潤う。
「あ……リュカさん、僕、寝てました？　すみません」
「いや、無理をさせた」
リュカはどことなく気落ちしているようで、リズは彼に心配をかけてしまったと思った。
そういえば、人の声がしない。そう思って辺りを見回したが、リュカ以外誰もいなかった。
「あれ？　皆さんは？」
「先に行ってもらった。リズの体調が良くなかったから」
「そうですか……僕、医者なのに、恥ずかしいです」
「いや、リズのせいじゃない。俺が悪かった」
「リュカさんが？　そんなことないですよ」
リズは今更ながら、リュカはぶっきらぼうだけど優しい人なのだと思った。
いつも自分を守ってくれるし、隣にいると心地いいから、ずっと一緒にいられたらいいのに……

とそこまで考えて閃いた。
「リュカさん！　僕まだそんなにお金を持ってないんですけど、立派な医者になって、頑張ってお金を稼ごうと思います！」
「……は？」
「だからリュカさん……あの、これからずっと、僕のそばにいてくれませんか？」
リズの言葉の意図が掴めなかったのか、リュカは小首を傾げる。彼の瞳は戸惑いを湛えていて、しかし未知の生き物を見つけた子供のように期待が籠もってもいた。
「それは、どういう意味？」
「終身雇用をお願いしたいんです！　ぜひリュカさんを！　僕がリュカさんをずっと雇います！」
リュカが一瞬で遠い目になる。
リズは何か間違っただろうかと思いながらも、リュカが色好い返事をしてくれるのを待った。
リュカを銀色の瞳でじっと見つめた。するとリュカはため息を吐き、彼にしては優しい声でたずねた。
「……終身雇用って、ずっと？」
「ずっとです、終身なので」
リズが頷くと、リュカは愉快なものでも見るような、笑いを我慢する表情になった。
切れ長の一重は鋭くて、でも怖いと思ったことはない。贅肉の一切ない筋肉質な頬、形の良い額にかかる黒髪も艶やか。

そんな端整な顔が徐々に近づいてきたかと思うと、視線を合わせたままリズの手を取り、手の甲にちゅと唇をつけた。まるで敬愛する人へ捧げるような仕草で、リズは驚いて手を引っ込めた。

「へ？　え？」

リズの顔が一気に赤くなる。リュカの顔が急に見られなくなって、下を向いて顔を両手で隠した。

（あれ、なんか僕、変かも……なんか、すごく恥ずかしい。何これ！）

するとリュカはリズの肩に頭を乗せて、リズの身体をしっかりと抱きしめた。

「ずっとリズと一緒にいれるなら、なんだっていい」

「え、いいんですか!?　よ、良かった……のかな？」

快諾されて嬉しいが、なんだか頭が混乱して整理がつかない。リュカと離れずに済んで安心したのに、恥ずかしさはちっともなくならなくて戸惑うしかなかった。

しばらく二人は寄り添って、互いの心臓の音を聞いていた。落ち着かない心臓はなかなか鳴りやまず、リズは視線をさまよわせていた。

リュカがそっとリズの鼠色の髪に触れる。

「気分はどう？　どこか気持ち悪いとかある？　お腹は空いてる？」

「あ、もう平気です！　お腹は空いてないです」

リズが焦って答えると、リュカは頷き、リズをゆっくりと離した。

「体調が落ち着いたならそろそろ行こうか。休むにしてもここよりオアシスのほうがいい」

リズが頷いて少しふらつきながら立ち上がると、すかさずリュカは腰を抱く。

それに違和感を覚えた。

（なんかリュカさん、近くない？）

怪訝に思ってリズがリュカを見つめていると、リュカは首を傾げながら、口角をニヤリと上げた。

「どうかした？　抱くぞ」

「へっ!?」

驚いている間にリュカは軽々とリズを抱き上げ、ラクダに乗せた。

（抱くって、持ち上げるって意味……はっ！　ぼ、ぼぼ、僕は何を考えて……!!）

顔がマグマみたいに熱くなって、リズは頬を手で押さえる。でも顔だけじゃなくて、リュカの唇が触れた手の甲も熱い。

なんだか自分の身体が制御できなくて困ってしまう。今までこんなことはなかったのに。

リズが戸惑っていると、リュカの腕がのびて前方を指さした。

「ここからオアシスまでは一晩ってところ」

「あ、はい」

「どうした？　まだつらい？　声かけたけど、また驚かせた？」

リュカの手が優しく頭を撫でてくれる。それで、リズは前にラクダに乗せるときは声をかけてと騒いだことを思いだした。

「……驚いてないです」

「なら、良かった」

そうしてリュカがリズの後ろに乗ると、ラクダはのんびりと歩きだした。
月明かりに照らされた道なき道を進みながら、リズは今まで感じたことのない幸福を感じていた。
リュカの腕が自分の腰に巻きついて、しっかりと支えてくれている。頭をリュカの胸にくっつけると、リズの心は大きな幸せで包まれた。
（僕、リュカさんのことが大好き）
ことりと、リズの心の穴にピースがはまったような気がした。たった数日間一緒にいただけなのに、もうこの先ずっと離れたくないと思うくらい彼を信用していた。
終身雇用の約束もしたし、あとは頑張って医者として成果をだしてお金をたくさん稼いで、二人で生きていけたらいい。
軍医の給料は危険手当が付くから、普通の医者より高給取りのはずだけど、大きな家を買ったりメイドさんを雇ったりできるのだろうか。
「足りるかな」
「何が？」
「いえ、足りるように頑張ります」
リュカが不思議そうにリズを見つめるのを横目に、リズは拳を握って空を見上げる。すると、これまで見たことのない綺麗な星空が広がっていた。
星々があちこちで瞬（またた）き、流れ星がいくつも天空を横切って、ずっと見ていても飽きない。砂漠の夜空がこんなに明るく綺麗だなんて、リズは知らなかった。

「すごく綺麗ですね、リュカさん」
「あぁ」
「こんなに綺麗な夜空を見たのは初めてです。ねぇ様にも見せてあげたいな」
もし叶うなら、ねぇ様だけじゃなく、兄様たちや母様、父様にも見せたい。リズはそう思ったが、もしかしたら皆はどうでもいいと思うかもしれない。
リズ以外は皆アルファで、オメガのリズとは考え方も感じ方も違う。リズが一人だけ異なっていることで、彼らはさぞかし困ったことだろう。
「僕ね、家族の中で一人だけオメガなんです」
ふいに、リズはリュカに自分のこと、そして溜め込んでいたこの思いを知ってほしくなった。
「誰も僕に医者になれって言わなくて、むしろ無理しなくていいって言うんです。そう言われるとまるで一線を引かれた気がしてつらいんです……だから僕、勉強を頑張ったんです。ずっと本を読んで、ずっと練習して、できる限りの時間を使って知識を詰め込みました。でも兄様もねぇ様も、僕を置いてどんどん困難な手術や難しい症例をこなしちゃうんです。皆が努力してるのはわかってる。でも僕がオメガだから全然差が埋まらないのかと思って、すごく苦しかった」
ほぅ、とリズは息を吐く。
「でも、こんな綺麗な星空を見たら、どうでもいいことで悩んでたんだなって笑えてきちゃいました。ねぇ様たちと比べても仕方ないんだから、僕は僕にできることを、ゆっくりでもいいから一生懸命やればいいのかなって、輝く場所もタイミングもそれぞれ違うのかなって」

リズは言い終えると、目を伏せた。太陽みたいに皆を照らせなくても、月みたいに夜空に君臨できなくても……小さな星もすごく綺麗だと。

「リズは頑張ってたよ。飛び級二回もして、首席で卒業したんだ。もっと誇っていい、簡単にはできないんだから」

しかしリュカの落ち着いた優しい声が聞こえてきて、リズは彼を振り向いた。

「好きなだけやればいい。リズが頑張れば、多くの人が助かる、それに真面目で優しい医師がこんな辺境の地に来てくれて……俺は嬉しい」

そう話すリュカの瞳は、まっすぐにリズを捉えていた。てっきりいつものように適当な返事をされるだけだと思っていたので、戸惑った。

「というかリュカさん、僕のこと知ってたんですか？」

「うん」

「二回飛び級したの、僕、全力を尽くしました、難しい勉強をいっぱいしたんです」

「そう、よくやったな」

認めてもらえたことが嬉しかった。無理しなくていいと言われるより、ずっと嬉しかった。

「僕、サララでも頑張ります。病気も怪我も薬についても、もっと！」

リズはリュカを見つめ返し、にっこり笑った。

「本当を言うと、サララに行くのが怖いと思ってました、僕なんかが軍医になってしまってもし皆を助けられなかったら、って」

「うん」

「でも、やれることをやるだけですね。そこがどこだろうと、僕が医師としてやることは何も変わりません」

言い終えると、リュカはリズに微笑み返してくれた。

その優しい瞳を見ていると、なんだか彼と気持ちが通じ合えた気がした。心の揺れがなくなって、今まであった悩みとか不安とかのもやが急に晴れたようだった。

そして唐突に、今のうちに自分の思いを伝えておこう、と思った。

「僕、リュカさんのことが好きです」

しかしリュカは黙ったままで、シャリシャリと、ラクダが砂を踏む音だけが聞こえた。返事が欲しいわけじゃない、ただ伝えたかっただけなのでそれで満足だった。

「……俺も」

随分間が空いてから、リュカが囁くような小さな声で呟いた。リズの告白からあまりに間が空いていたので、リズは一瞬なんのことかわからなかった。

「なんですか？」

「俺も、リズが好き」

「えっ!?　あ、そ、そうなんですか……えっと、あの、えっと」

リズはリュカの返答が嬉しすぎて、返事もままならなかった。

だって、友達として初めて好きになってもらえたのだから。

「でもこれからもっとお互いを知って、それでも一緒にいてくれるなら、受けようと思ってる」
「受ける？　何を」
リュカの顔を覗き込むと、彼は優しく微笑んだ。
「結婚の話」
「……え？　リュカさん結婚するんですか？」
「うん、したいと思ってる」
にこりと微笑むリュカとは対照的に、リズは急激に青ざめた。
リュカが結婚するとなると、終身雇用の話はどうなるのだろうか。リュカに妻がいるということは、そのためのメイドも雇うことになるから、その分追加でお金がかかってしまう。
「いつ結婚するんですか？」
「リズがいいならいつでも」
「ぼ、僕!?　ま、まだ給料ももらってないし、どれくらい収入があるかもわかってなくて」
初任給の半分をリュカに渡すとしても、リュカの妻を養うにはいくら必要なのか、とリズは必死に頭の中で計算を始める。いくらだとしても残りの給料ではメイドは確実に雇えないから、家事を自分でやらなくてはいけない。果たして、できるのだろうか……？
「もう少し待ってもらっていいですか」
「もちろん」
バクバクとリズの心臓が激しく高鳴る。リュカに結婚を待たせるわけにはいかないが、先立つものがなくてはどうしようもない。
と、そこでリズは妙案を閃いた。
リズは腐っても公爵家の三男だから、どこかの裕福な人に出資してもらえるかもしれない。でも今まで縁談すら来たことがなかったのに、急にそんな都合のいい相手が見つかるだろうか。
（軍医の仕事に慣れたら、いい人がいないかねぇ様に相談してみよう）
まずはサララで一年間働いて成果を出す。資金繰りのことはそれから考えよう、と心に決める。
それにしても心が晴れないのはなぜだろう、とリズは満天の星を見上げながら、そっと胸を押さえた。

◇
◆
◇

砂漠を夜通しラクダで移動して、リズとリュカは中継地のオアシスへたどり着いた。
古くから砂漠では、水源が大切に守られてきた。オアシスの周りにはヤシが生い茂り、少し離れた場所には小さな町がある。
大きな門などはないが、町を取り囲むように石垣が何重にも張りめぐらされ、砂の侵食を防いでいた。
石で造られた水路にはオアシスの湧水が均等にながれ、町の給水場を経由して各家庭に水が行き渡るようになっているのだとか。

立ち読みサンプル
はここまで